

近江八景：瀬田の夕照

琵琶湖から大阪湾へと流れる瀬田川は、何世代にもわたって大津の重要な水路となってきました。大津は、東京と京都をつなぐ東海道において、京都の直前に位置する街であり、首都への往来のために無数の旅行者たちが瀬田川を渡っていきました。日本中に鉄道が敷かれる前は、長さ 224 メートルの瀬田の唐橋が瀬田川を横断する最も簡単な方法であり、この橋はそれ自身が一部となっている東海道と、大津の街の両方を象徴する存在になりました。

この景観を描いた歌川広重（1797～1858 年）の木版画は、川沿いに点在する帆船と、その向こうにある湖を描いています。瀬田の唐橋は手前に大きく描かれており、橋の途中で島をまたぎつつ、瀬田川を横断しています。その背景では、三上山が不気味にそびえ立っています。

現在でも湖には多くのボートがありますが、帆船はそれほど多くありません。また、瀬田の唐橋は、新幹線の鉄道橋と、さらに大きな高速道路の橋という近代的な橋の間に挟まれています。広重が描いた古い木の橋は、その後コンクリートで改築されましたが、昔ながらの魅力を保っています。